

# 生活経験を基に市規模の様子を理解する小学校社会科学習

## —特徴的なまちの明かりに着目して—

永田 成文\*・石田 智洋\*\*

Social studies lesson in elementary school leading to understanding the situation of city through life experience : Focusing on the characteristic electric lights of cities

Shigefumi Nagata\* and Tomohiro Ishida \*\*

### 要 旨

第3学年の市規模の地域を扱う一般的な社会科学習では、特徴のある地理的事象が見られる場所を取り上げて調査し、地図にまとめる活動がなされている。このような学習では、身近な地域との関連が薄く、市規模全体の空間的な様子を児童との関わりから捉えにくかった。本稿の目的は、生活経験に基づいた市規模の地域を調査する社会科学習を提案することである。

児童の生活経験に基づいた市規模の地域調査として、地域の自然的・社会的条件となる地理的事象と特徴的なまちの明かりという地理的環境を取り上げ、地理的な見方・考え方を働かせ、身近な地域での学びと地理学の全域と基域という考え方をを用いるという地理的アプローチを活用する。この学習論を基に、単元「四日市ってどんなまち」(8h)を開発し、実践した。

児童が市規模の地域の様子を生活経験に基づいて理解できたかを分析する手法として、生活経験に基づく市規模の地域調査の活用と地理的アプローチに基づく市規模の地域認識についてのルーブリックを基に、調査の各段階の児童の様子や発言、市規模の地域の様子を話し合う第7時の授業記録、単元後の児童の感想から分析した。

これらの分析の結果、学習段階がすすむにつれて児童は地域スケールや空間を意識して地域を捉え、特徴的な地域の明かりに着目することで生活経験に基づいた理解を深め、最終的に市規模の地域に見られる明かりの要因を全域と基域の地理的事象から説明できるようになった。本稿で開発した単元「四日市ってどんなまち」は、生活経験を基に、地理的アプローチを活用して市規模の様子を理解する小学校社会科学習のモデル単元といえる。

キーワード：小学校、地域学習、市規模、地理的アプローチ、明かり

## I. 問題の所在

平成29年に公示された学習指導要領(以降「現行学習指導要領」と表記)の小学校社会科では、第3学年で身近な地域や市町村規模の地域、第4学年で都道府県規模の地域のように地域学習が学年別に示され、系統的なスケール規模が意識されるようになった。また、小学校社会科の各内容は、①「地理的環境と人々の生活」、②「歴史と人々の生活」、③「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」の区分のいずれかに位置づけられ、小学校社会科と中学校社会科の地理的分野・歴史的分野・公民的分野との系統性がより明確になった<sup>1)</sup>。

社会科学習が始まる第3学年の内容において、(1)「身近な地域や市区町村の様子」は①「地理的環境と

人々の生活」に、(2)「地域に見られる生産や販売の仕事」と(3)「地域の安全を守る働き」は③「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」に、(4)「市の様子の変り変わり」は②「歴史と人々の生活」に位置づけられている<sup>2)</sup>。生活科の「地域と生活<sup>3)</sup>」の内容と接続した、第3学年の社会科学習の導入となる(1)は、①の区分のみに属する地理的内容であり、身近な地域や自分たちの市区町村規模(以降「市規模」と表記)の様子を大まかに理解し、場所による違いを考え、表現する資質・能力の育成が求められている。内容(2)~(4)においても、①の区分である地理的内容も含まれており、内容(1)は社会科学習の基盤となっている。また、内容(1)は、現行学習指導要領において、身近な地域よりも市規模の地域に重点が置かれるようになった。

\* 三重大学教育学部

\*\* 四日市市立常磐小学校

身近な地域で見学したり聞き取り調査をする際の視点を、市規模全体を調べる際に生かすことで地理的環境の概要を理解することが大切である<sup>4)</sup>。身近な地域の学びを基に、地域規模の違いと空間を意識して市規模の地域の様子を捉える必要がある。

第3学年の社会科学習において、市規模の地域を扱う一般的な授業では、田畑や工場や山などの特徴ある地理的事象が見られる場所を取り上げて調査し、地図にまとめる活動がなされている<sup>5)</sup>。このような学習では、身近な地域との関連が薄く、市規模全体の空間的な様子を捉えにくくなる。空間を手段として、①「地理的環境と人々の生活」を踏まえた上で、③「現代社会の仕組みや働きと人々の生活」に関わる地域社会の様子を科学的に捉えていくことを目的とした実践<sup>6)</sup>は多いが、①「地理的環境と人々の生活」そのものを主眼とし、地域の様々な地理的事象を取り上げ、身近な地域の学びを基に、位置や空間を意識して市規模の地域の様子を理解することを目的とした実践は少ない。

田山(1997)は、第3学年の社会科学習において、札幌市を事例とし、身近な地域の調査を手がかりに、道路・建物、工場・住宅・畑の広がり、地形グループに分けて地域調査を行い、それらの結果を統合して1つの地図にまとめている。身近な地域の調査における地図づくりを市規模の地域の調査において応用し、札幌市の様子を地形と土地利用の関係から捉え、調査に基づく地図づくりがなされている。身近な地域との関連から、市の様子は場所によって違いがあることを捉えやすく、身近な地域の学びを基に、市規模の地域の様子を捉える先行実践である。しかし、市規模の地域を扱う一般的な授業と同様に、個々の地理的事象の位置や分布に着目するため、市全体について様々な地理的事象を総合して捉えにくく、児童とのつながりから市規模の地域の様子を理解することが不十分である。

魚地(1985, p.7)は、「小学校の社会科で取り上げる地域性とは、あくまでもそれぞれの学校における子どもの生活経験が基盤であり、それとの関係でとらえる地域性でなければならない」と述べている。児童とのつながりから市規模の地域の様子を理解する方策として児童の生活経験に基づいた考察が考えられる。

本稿の目的は、生活経験に基づいた市規模の地域を調査する社会科学習を提案することである。方法として、第一に、位置や空間を意識して市規模の地域の様子を生活経験に基づいて理解する小学校社会科学習の学習論を提示する。第二に、提示した学習論に基づいた単元を開発し、授業実践を行う。第三に、児童が学習論で示した方法を活用でき、生活経験に基づいて市規模の地域の様子を理解することができたのかについて分析し、開発した単元の評価を行う。

## II. 生活経験に基づいた市規模の地域調査

### 1. 学習内容—地理的事象とまちの明かり

清水(2006, p.94)は、地域を目的概念で捉えた場合、ある程度まとまった広がり、境界がはっきりしていることが望ましいとしている。市規模において、地域の様子は場所によって違いがあることや全体の様子を児童の生活経験に基づいて理解させるために、市規模に見られる自然的・社会的な地理的事象とともに児童が日常生活でイメージしやすいものを取り上げる。

エネルギーの使用から児童がイメージしやすい社会機能として、「家庭生活」、「産業」、「運輸・交通」がある(萩原・永田・山根, 2017, pp.26-27)。「家庭生活」は、衣食住と関わっており、児童は炊事、照明、暖房などを日常的に経験している。「産業」は、地域社会と関わっており、児童は身近な地域の学習で土地利用と関連して学んでいる。「運輸・交通」と関わる電車や自動車を児童は利用した経験がある。本稿では、地形や土地利用などの様子や建物や産業の様子や交通の様子などの地理的事象に加え、「家庭生活」、「産業」、「運輸・交通」と関連する特徴的なまちの明かりに着目する。児童は家庭生活の中で照明を使用し、夜に様々な施設に明かりが灯ることを知っている。特徴的なまちの明かりに着目することで、生活経験に基づいて他地域の様子を予想することが可能になる。具体的には、夜に明るい地域は、人や産業や交通機関が集まっていたり、多くの人々が暮らしていることと関連づけることができる。また、場所の明るさの違いから、その地域の自然的・社会的条件にも目を向けることができる。

### 2. 学習方法—地理的アプローチの活用

地理的な見方や考え方を働かせ、地域の課題を把握し、解決に向けて仮説を立てて調査し、分析結果をまとめるという地理独自の手法が地域調査である。2016年の中央教育審議会答申では、「地理的な見方・考え方」は地理独自の視点や方法とされ、視点例として小学校では位置や空間的な広がり、中学校社会科地理的分野や高等学校地理歴史科の地理科目においては、位置や分布、場所、人間と自然環境との相互依存関係、空間的相互依存作用、地域が示された<sup>7)</sup>。これらの5つの視点は、1992年の地理教育国際憲章において示された地理学の概念であり、地理学の手法を方法と捉えれば、地理特有のアプローチとして、「地理の見方・考え方」をイメージしやすい(永田, 2017, p.107)。

第3学年は、地理的環境と人々の生活を扱う基礎の段階として、特に地表面上でのパターンである位置や分布、自然的・人文的特徴を示している場所、特徴づけられた一定の空間的広がりとしての地域に着目する。

市規模の地域の調査では、全体のフィールドワークは難しいため、地理的な見方・考え方を働かせ、身近な地域における学びと生活経験を関連づけながら調査していく。また、地域の様子は場所によって違いがあることや、市全体の地域の様子を捉えるために、地理学の全域と基域という考え方をを用いる<sup>8)</sup>。具体的には、市全体と市に属する地区を取り上げ、各地区において自然的・社会的条件とともに特徴的なまちの明かりに着目する。生活科の生活圏における自分の関心のある公共施設などのたんけんや社会科の身近な地域の田畑や、住宅や商店などを観察・調査した経験を踏まえ、基域となる自分たちが生活している自地区と他地区と比較したり、他地区同士を比較する。これらの基域の特色を総合して全域となる市規模の様子を考察する。地理的な見方・考え方、全域と基域という地理的アプローチを活用して市規模の地域の様子を理解する。

### 3. 授業構成—まちの明かりに着目した地域調査

生活経験に基づいた特徴的なまちの明かりに着目して、地理的アプローチを活用した市規模の地域調査の構成を示したものが表1である。

第1段階では、自然的・社会的条件や特徴的なまちの明かりという地理的環境を取り上げ、主に位置の視点から全域を確認する。第2段階では、自然的・社会的条件や明かりを関連づけ、主に場所の視点から自地区を調べる。第3段階では、自然的・社会的条件や明かりを関連づけ、主に場所の視点から地区を比較して調べる。第4段階では、明かりから自然的・社会的条件を捉え、主に地域の視点から全域の特色を考える。

表1 生活経験に基づいた市規模の地域調査の構成

地理的視点から全域と基域を捉える探究過程	全域： 位置	<b>第1段階「地域の概要を捉える」</b> 《自然的・社会的条件と明かり》 ○航空写真や地図や資料から、自然的・社会的条件である地理的事象や明かりが地域に見られることを確認する。
	基域： 場所	<b>第2段階「自地区の様子を捉える」</b> 《自然的・社会的条件と明かり》 ○身近な地域の調査を踏まえ、写真や資料から自然的・社会的条件と明かりを関連づけて自地区の特徴を調べる。 <b>第3段階「他地区の様子を捉える」</b> 《自然的・社会的条件と明かり》〈比較〉 ○自地区の特徴を踏まえ、写真や資料から自然的・社会的条件と明かりを関連づけて比較しながら他地区の特徴を調べる。
	全域： 地域	<b>第4段階「地域の様子を捉える」</b> 《自然的・社会的条件と明かり》〈比較〉 ○明かりを視点として、各地区の特徴を空間を意識した比較から捉え直し、全域の市規模の地域の様子を考える。

※《 》は地理的環境、〈 〉は地理的手法を示す。(筆者作成)

## Ⅲ. 単元「四日市ってどんなまち」の開発

### 1. 全域となる四日市市の概要

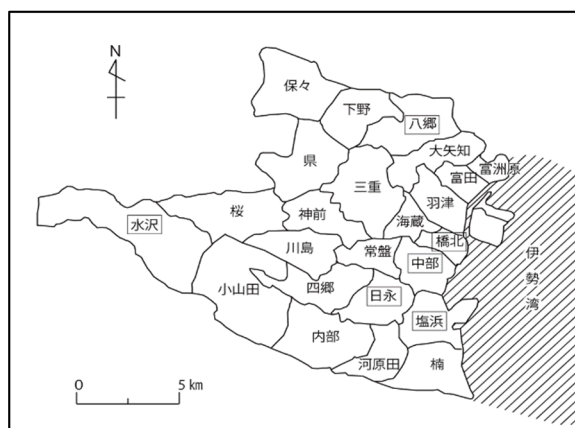
市規模の地域として四日市市を事例として地域調査を行う。四日市市は、三重県の北部に位置し、面積は約206 km<sup>2</sup>、人口は約31万人(2020年)の三重県最大の都市である。1897年に市制が施行され、その後、徐々に市域を広げ、西側は鈴鹿山脈、東側は伊勢湾に面している。市域には、JR関西本線、近鉄名古屋線・湯の山線、四日市あすなろ鉄道などの鉄道網が整備され、名古屋と大阪を結ぶ東名阪自動車道や旧東海道となる国道1号などの主要幹線道路が通っている。

四日市市は石油コンビナートなどを要する中京工業地帯の代表的な工業都市である。コンビナート群は日本有数の工場夜景の聖地である。コンビナート群がある場所に見える明かりは、四日市市の産業を支える象徴となっており、四日市市に住む児童のほとんどは特徴的なまちの明かりとして意識している。

### 2. 基域となる地区の概要

四日市市は行政的に24地区に区別されている(図1参照)。開発した単元を実践する四日市市立泊山小学校は日永地区に位置する。日永地区は旧東海道が通っていた交通の要衝であり、郊外型の商業施設が多く、新興住宅地が広がっている。

四日市市の中心である近鉄四日市駅周辺の中地区には、市役所などの公共施設や近鉄百貨店など商業地が広がっており、夜でも明るい場所が多い。中地区に隣接する塩浜や橋北地区には石油化学コンビナートが多く、夜に明かりが灯される。四日市市の北部に八郷地区、西部に水沢地区が位置している。両地区は車のライトによる明かりはあるが、夜は基本的に暗い。このように各地区の自然的・社会的条件は特徴的なまちの明かりから関連づけることができる。



※枠は単元で取り上げる地区

(筆者作成)

図1 全域である四日市市と基域である24地区

### 3. 単元「四日市ってどんなまち」の展開

生活経験に基づいて、地理的アプローチを活用して市規模の地域の様子を理解することを目的として開発した単元が「四日市ってどんなまち」(8h)である<sup>9)</sup>。

単元では全域の四日市市の中で、住宅の多い、お店の多い、工場が集まる、山がちなどの特徴がある6つの地区を基域として取り上げた。表2は6つの地区について、土地の様子、建物や産業の様子、交通の様子という自然的・社会的条件とともに各地区の明かりの様子を表している。

開発した単元を授業展開の形で表したものが表3である。目標は「自然的・社会的条件や特徴的なまちの明かりに着目することで、四日市市の特色ある地区の特徴を調べ、地域の様子は場所によって違いがあることや市全体の地域的特色をつかむ」である。

まず、表1の第1段階と関わり、四日市市全体を撮影した航空写真を見せた(図2参照)、児童が生活する日永地区のほかにも四日市市にはいろいろな地理的事象があることに気づかせた。その後、夜景写真を見せ、明るいところとそうではないところに目を向けさせた。明かりの様子から四日市市には様々な場所があることを児童に意識させた。

第2段階では、基域となる6地区について、昼間の様子とともに夜間の様子を示した写真を活用して、自然的・社会的条件と明かりを関連づけた。自地区である日永地区について、住宅地と幹線道路沿いに商業地があることを捉え、夜に明かりが灯ると明るいことを確認した。

第3段階では、日永地区と比較して、中部地区には

公共施設や商業地や交通網が集まっていること、夜は明るいことを確認した。塩浜地区や橋北地区には工場が多く、夜に明かりが灯っていることを確認した。山がちである八郷地区と山間部の水沢地区には人が少なく、八郷地区の高速道路のインターチェンジ以外ではあまり明かりが灯っていないことを確認した。

第2段階と第3段階では基域である各地区の様子について、昼夜の写真や副読本を使って調べたり、相違点や共通点を考えたりして、地域の様子は場所によって違いがあることを意識させた。

最後の第4段階では、基域となる6地区はどこでも同じ明かりとなっているかを考え、各地区の様子を捉えた写真を貼った四日市市の模造紙地図を見て、全域である四日市市の特色を考えた。



(副読本：のびゆく四日市より)

図2 四日市市の航空写真

表2 四日市市の特徴ある6地区の様子

		基域となる地区の様子					
		①日永地区 1941年～市域	②中部地区 1897年の市域	③塩浜地区 1930年～市域	④橋北地区 1897年の市域	⑤八郷地区 1954年～市域	⑥水沢地区 1957年～市域
自然的・社会的条件や明かりの様子	土地	・西側に丘陵地が広がる ・天白川が北側に流れる	・平らな土地 ・三滝川が北側に流れる ・海に面する	・平らな土地 ・鈴鹿川が南側に流れる ・海に面する	・平らな土地 ・海に面する	・山がちな土地	・ <u>山間部</u> ・宮妻峡
	建物産業	・ <u>住宅地や商業地</u> が広がる	・ <u>市役所や博物館</u> ・ <u>百貨店など商業地</u>	・ <u>コンビナートなど工業用地</u>	・ <u>コンビナートなど工業用地</u> ・ <u>万古焼など伝統産業</u>	・ <u>住宅地</u> ・ <u>御在所サービスエリア</u>	・四日市少年自然の家 ・ふれあい牧場 ・茶畑
	交通	・ <u>自動車が多い</u> ・ <u>国道1号線</u> ・ <u>旧東海道</u>	・ <u>自動車が多い</u> ・ <u>広い道路</u> ・ <u>近鉄四日市駅</u> ・ <u>交通の発着点</u>	・ <u>自動車が多い</u>	・ <u>自動車が多い</u>	・ <u>高速道路で自動車が多い</u>	・ <u>道路や自動車が少ない</u>
	人	・ <u>住宅地に住んでいる人</u> ・ <u>買物や食事をしに来る人</u> ・ <u>国道1号線を自動車で往来する人</u>	・ <u>仕事をしている人</u> ・ <u>買物や食事をしに来る人</u> ・ <u>近鉄四日市駅から乗り換える人</u>	・ <u>仕事をしている人</u> ・ <u>工場に働きに来る人</u>	・ <u>仕事をしている人</u> ・ <u>工場に働きに来る人</u>	・ <u>住宅地に住んでいる人</u> ・ <u>東名阪自動車を自動車で往来する人</u>	・ <u>住んでいる人が少ない</u>
	明かり	・ <u>商業地の照明</u> ・ <u>住宅地の照明</u>	・ <u>商業地の照明</u> ・ <u>駅などの照明</u>	・ <u>コンビナートの照明による工場夜景</u>	・ <u>コンビナートの照明による工場夜景</u>	・ <u>高速道路の照明</u>	・ <u>照明が少なく暗い</u>

※二重下線は各地区で特に取り上げる場所の特徴である。

(筆者作成)



表3 単元「四日市ってどんなまち」(8h)の授業展開

学習内容	主な発問や指示【概念】	学習活動《手法》	習得知識【経験】	資料
第1段階：全域の概要	1. 四日市市の様子	○航空写真から地域の様子を読み取る。 ○航空写真から位置を確認する。 ○地域名を発表し、地図で確認する。 ○学区の周辺地域を意識して発表する。	○海に面しており、山や田、工場や住宅地や工場、四日市ドームやポートビルがある。 ○泊山小学校は四日市市の南、近鉄四日市駅は四日市市の東にある。 ○四日市市の範囲を行政区分として確認する。 ○お茶、豚テギ、なが餅、団扇などの特産物がある。	写：四日市市の航空写真(副読本) 地：四日市市全図
	2. 四日市市の明るさ	○夜景の写真から光が強いところがどこかを考える。 ○資料から四日市市の地区を確認する。	○ポートビルなどの建物や、住宅や工場(煙突ランプや炎)が明るく、暗いところもある。 ○四日市市は日永地区を含めた24地区から構成されている。	写：羽津山緑地公園からの夜景 資：副読本
第2段階：自地区	3. 日永地区の明かりと地域の特徴	○写真や資料から調べ、土地の使われ方、建物、人、交通の様子を基に地域の特徴を考える。 ○交通の様子に着目して考える。	○国道1号線を中心にショッピングセンターや家電販売店、ファミリーレストランなどの買物をすることが多く、夜は明るい【経験】。 ○店が集まっているので、買物や働きに来る人が多く、道路が混んでいる。	写：日永地区昼夜 資：副読本
第3段階：他地区	4. 中部地区、塩浜地区・橋北地区の明かりと地域の特徴	○航空写真から地区の位置と地域の様子を確認する。 ○昼夜の写真や資料から調べ、日永地区と《比較》して考える。 ○昼夜の写真や資料から調べ、日永地区と《比較》して考える。	○海に面しており、北から橋北・中部・塩浜地区の順に位置し、鉄道や工場がある。 ○図書館や病院などの公共施設や商店街や鉄道の駅などがあり、夜は明るい【経験】。 ○橋北に公園、塩浜にヘルスプラザ、両方に工場があるため夜はとても明るい【経験】。	写：Google map 写：中部地区昼夜 資：副読本 写：橋北・塩浜地区昼夜 資：副読本
	5. 中部地区、塩浜地区・橋北地区の比較	○3地区を《比較》して、相違点と共通点を考える。	○中部地区は公共施設やビル、商店やゲームセンターなどが集まる商業施設が多く、橋北・塩浜地区は臨海部に工場が多く、3地区とも夜は明かりが灯されて明るい【経験】。	
	6. 八郷地区・水沢地区の明かりと地域の特徴と比較	○八郷地区・水沢地区の特徴を調べ、発表しましょう。 ○八郷地区・水沢地区の違うところと同じところを考えましょう。【場所】	○航空写真を基に昼夜の写真や資料から調べ、日永と《比較》して考える。 ○2地区を《比較》して、相違点と共通点を考える。	○八郷地区は山がちで地形で、日永に比べて住宅地が少なく高速道路が通っている。水沢地区は山間部となり、茶畑やもみじ谷がある。 ○水沢地区より八郷地区の方が人や住宅が多く、両地区は自然が多くて夜は暗い【経験】
第4段階：全域の様子	7. 四日市市の明かりの地区による違い	○雑誌『るるぶ四日市』の魅力に入る言葉を予想しましょう。【場所】 ○四日市の中で、明かりはどのようなところで使われていますか。【場所】 ○明るさは、四日市市の地区によって違うのでしょうか。【地域】 ○明かりはどこからもってくるのでしょうか。	○橋北・塩浜地区などの工業地区は夜が魅力で、工場夜景の明かりをアピールしている。 ○工場やビルやデパートや住宅が多い地区で明かりが多く使われている。 ○日永地区は住宅、中部地区は商店街や駅やビル、橋北・塩浜地区は工場に明かりが使われ、山がちで八郷・水沢地区はあまり使われていない。 ○校区たんけんをもとに変電所や電線を思い出す【経験】。	資：雑誌『るるぶ四日市』の表紙
	8. 四日市市の地域的特色	○四日市市の地域的特色を明かりの様子から考えましょう。【地域】	○住宅やお店が多い日永地区、駅や商店街やビルが多い中部地区、工場が多い橋北・塩浜地区では明かりが多い。	地：6つの地区の写真を入れた四日市市

※各時間の主要発問を示している。主な発問や指示の【 】は取り上げる地理的概念、学習活動の《 》は地理的手法、習得知識の〔 〕は明かりと関わる生活経験、資料の資は雑誌や副読本、写は写真、地は地図を示す。(筆者作成)

#### IV. 市規模の地域調査の活用と地域認識

##### 1. 分析方法

本稿では、「地域の自然的・社会的条件や明かりという地理的環境を関連づけて、基域となる自地区を基盤として、他地区と比較するような地理的アプローチを活用する市規模を地域調査する地域学習を実践すれば、児童は生活経験に基づいて基域である地区の様子や全域である市規模の様子を理解できる」という授業仮説を設定した。表4のA生活経験に基づく市規模の調査ができていくかという方法的側面とB地理的アプローチに基づく市規模の地域認識ができていくかという内容的側面のルーブリック表を基に分析する。

まず、クラス全体の児童の学びをみるために、単元の各段階における児童の様子や発言から分析する<sup>10)</sup>。次に、個々の学びをみるために、生活経験とつながる明かりに着目して、土地の様子・建物・人・交通の様子という自然的・社会的条件を確認し、市規模の地域の様子を話し合う第4段階の第7時の授業記録を基に分析する。さらに、単元後の主な児童の感想を分析する。

##### 2. 各段階の児童の様子や発言からの分析

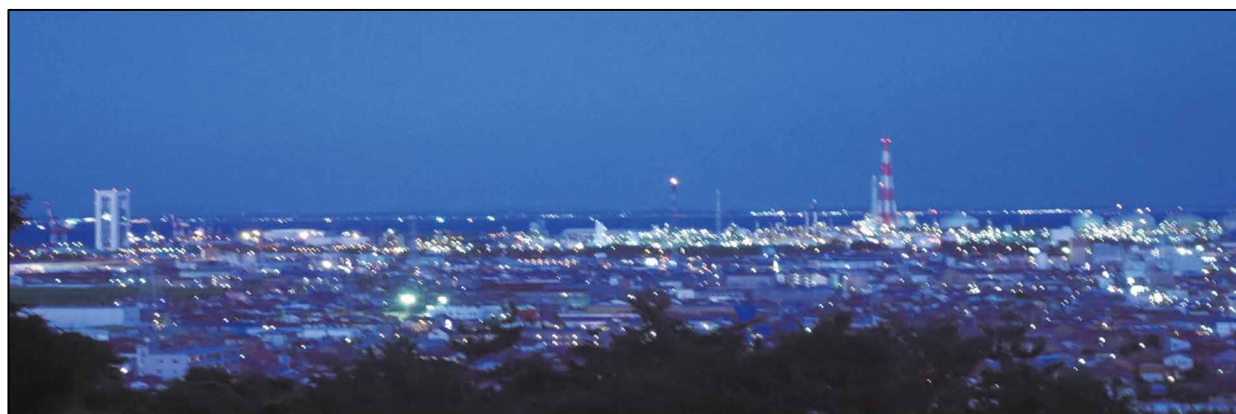
第1段階の1限目、航空写真から気づいたことを話し合う場面では、四日市市が海に面していること、山に雪があること、山や田や工場や住宅が見られ、特に工場が多いことなどに気づいた。四日市ドームやポートビル、野球場、バスケット場など児童が行ったことのある場所の名前が出された。地域の境界については、あやふやなため、他市で行ったことのある場所を挙げる子どもがいた。四日市市について知っていることを尋ねた場面では、お茶、豚テキ、なが餅、団扇などの主に特産物について発言し、泊駅、イオンタウン、猿法師公園など校区の施設を発表する児童もいた。A：生活経験に基づく市規模の地域調査の活用、B：地理的アプローチに基づく市規模の地域認識(以降「A、B」で表記)はそれぞれ1、1の段階であると考えられる。

2限目の夜景写真(図3参照)から気づいたことを話し合う場面では、建物の光やポートビルの光、住宅や工場の光、赤白煙突のランプや炎、明かりがきれいに見える場所があることに気づいた。A2、B1の段階であると考えられる。

表4 授業分析のためのルーブリック表

	4：よくできた	3：だいたいできた	2：一部できた	1：できない
<b>A：生活経験に基づく市規模の地域調査の活用</b>	○地域の自然的・社会的条件や明かりの視点を関連づけ、地域内の地区を地域として捉え、比較しようとしている。 《自然的・社会的条件》 《明かり》 〈比較：地域〉	○地域の自然的・社会的条件や明かりの視点を関連づけ、地域内の地区を場所として捉え、比較しようとしている。 《自然的・社会的条件》 《明かり》 〈比較：場所〉	○地域の自然的・社会的条件や明かりの視点の活用は意識しているが、それらを関連づけて捉えようとしていない。 《自然的・社会的条件》 《明かり》	○地域の自然的・社会的条件があることは意識しているが、明かりの視点を意識して捉えようとしていない。 《自然的・社会的条件》
<b>B：地理的アプローチに基づく市規模の地域認識</b>	○地域の様子は場所によって違いがあることを踏まえ、基域である地区規模や全域である市規模の様子を捉えることができていく。 【位置】 【場所】 【地域：全域】	○地域の様子は場所によって違いがあることや基域の地区規模の様子は捉えているが、全域である市規模の意識が弱い。 【位置】 【場所】 【地域：基域】	○地域の様子は場所によって違いがあることを捉えているが、全域や基域の地域規模を意識できていない。 【位置】 【場所】	○地域の存在は意識しているが、地域の様子は場所によって違いがあることを捉えることができていない。 【位置】

(筆者作成)



(筆者撮影)

図3 羽津山緑地公園からの四日市市の夜景

第2段階の3限目、自地区の日永地区の特徴を発表する場面では、ショッピングセンターや電化製品販売店、ファミリーレストランなどのお店の名前や夜はそれらの商業施設で明るくなること、校区は家が多いことや泊駅があるなどの発言が出された。また、交通の様子から考える場面では、商業施設が集まる国道1号線は、お店が集まっているから人が集まるので渋滞するという発言が出された。A2、B2の段階であると考えられる。

第3段階の4・5限目、中部地区の特徴を発表する場面では、デパートや映画館やゲームセンターなどの商業・娯楽施設があることや、四日市市立図書館や四日市市文化会館、市立四日市病院などの公共施設があり、よく訪れる場所であることが出された。また、「中部地区の夜はきれいで明かりがつく」と発言した児童がいるなど、商業・娯楽施設や公共施設は、夜に明かりが灯されていることを資料から捉えていた。橋北・塩浜地区の特徴を発表する場面では、北勢健康増進センターやテニスコートのある三滝公園があることや、自地区の日永地区よりも工場が多いという場所による違いの考えが出された。中部地区と橋北・塩浜地区との違いや共通点を話し合う場面では、公共施設や商業・娯楽施設の多い中部地区、コンビナートのある橋北・塩浜地区の場所の特徴が出された。また、夜に明かりが灯るが、商業地と工業地の違いによる明かりの違いの発言は出なかった。A3、B2の段階であると考えられる。

第3段階の6限目、八郷・水沢地区の特徴を発表する場面では、山がちな地域においても、住宅地やゴルフ場などの娯楽地、高速道路や大学などがあるところと、茶畑や森林、ふれあい牧場など自然を生かしたところがあるという地域の広がりである空間を意識した発言が見られた。また、「水沢地区と比べて八郷地区の方が人が多い。家が多い」や「水沢地区は日永地区と比べて森が多い」といった自然的・社会的条件を比較した発言も出された。また、これまでの地区とは違い、明かりはあまり灯っていないと考える児童が多かった。A3、B2の段階であると考えられる。

第4段階の7限目、四日市市の魅力を考える場面では、四日市市は明かりをアピールしていることに気づいた。四日市市で明かりはどのような地区でどう使われているのか考える場面では、「日永地区には人が住んでいるから、アパートやマンションに明かりがついている」、「中部地区にはお店やデパート、ビルなどの会社の明かりがある」「水沢地区には茶畑が多いから、ホテルなどの自然の光がある」などそれぞれの地区を空間的な地域として捉え、土地や人や建物や交通の様子によって、明かりの使われ方に違いがあることに気

づいた。明かりの出所を考える場面では、「変電所から来る」や「電線から来る」や「電気の工場から来る」など校区探検や生活経験による発言が出された。A3、B3の段階であると考えられる。

第4段階の8限目、四日市市の特徴を明かりの様子から考える場面では、「水沢地区などよりも、塩浜地区の方が明るいと思います。なぜなら、塩浜はコンビナートで明るいけど、水沢は茶畑が多いので、明かりはあまりありません」や「日永地区はお店が多いので、とても電線が多いと思います。塩浜地区はとても工場が多いので、明かりがとても光っていて、電線が多いです」など、明かりに関わる電線の視点が加わった意見が出された。自然的・社会的条件や明かりを関連づけ、市規模の地域を意識した地区の比較により、場所の違いを捉えているが、四日市市の全体像を捉える意識が弱い。A4、B3の段階であると考えられる。

第1段階から第4段階に授業が進むに従い、児童は生活経験に基づいて市規模の地域調査を行い、地理的アプローチを活用することで、地域規模や空間を意識して地域を捉え、理解を深めていることがわかる。

### 3. 第7時の授業記録からの分析

第7時は、教員と児童による発言の意味内容から、「四日市市の特徴的な明かり」「明かりがどのようなところで使われているか」「どの地区でどのくらい明かりが使われているか」の3つのパートに分かれる。

表5は、自然的・社会的や明かりを関連づけて、四日市市の地区を意識しながら考察している第2・第3パートの授業記録とルーブリック表による分析結果を示している<sup>11)</sup>。

第2パートは、教員によるT1「四日市市のいろいろな場所を比べ、明かりはどのようなところで使われているでしょう」という問いかけから始まる。前半は、C1「四日市のコンビナートではとてもきれいな光が見られるそうです」のように、地区を意識せずに自然的・社会的条件と明かりの関係のみから捉える発言が多かった。C11「中部地区は近鉄四日市駅やJR四日市駅があるので、夜遅くまで電気がついて明るいです」やC13「塩浜地区はコンビナートや工場が多いので明るくてきれいです」やC17「水沢地区は森や自然が多いので、夜になると真っ暗になります」など、後半に地区の自然的・社会的条件と明かりの視点を関連づけて、地域の様子は場所によって違いがあることを捉えている児童の発言がみられるようになった。

第3パートは、児童による「質問ですが、どこへ行っても同じ光り方をしているんですか」という問いかけから始まる。これは、四日市市には様々な「まちの明かり」が見られる場所があるが、空間的にどうなってい

表5 第7時の授業記録による分析(第2・第3パート)

		教員の支援と児童の発言	A	B
明 か り が ど の よ う な と こ ろ で 使 わ れ て い る か	T1	四日市市のいろいろな場所を比べ、明かりはどのようなところで使われているでしょう。		
	C1	<u>四日市のコンビナートではとてもきれいな光が見られる</u> そうです。	3	-
	C2	四日市第一コンビナート。 <u>場所は(昭和)四日市石油あたりの工場がライトアップされて、明かりがついていて、色が黄色、緑色や白です。</u>	3	2
	C3	<u>水沢地区</u> には <u>自然の光、生き物の光が光っている</u> 。ホテル。	3	2
	C4	たぶん夜は、 <u>光が多い</u> 。理由は、夜は仕事から帰る時に <u>車が通るから</u> 。	3	-
	C5	夜になると、 <u>外の電柱も、家も光ります</u> 。 <u>車はあまり光りません</u> 。	3	-
	C6	<u>ビルや会社などの高い場所が光りやすい</u> と思います。	3	-
	C7	(C4)C5さんの意見に反対で、 <u>車にはライトがあるので、車は光る</u> と思います。	3	-
	C8	<u>光がついているところは、家とかお店とかビルです</u> 。 <u>寝ている時、明かりはつかない</u> 。	3	-
	C9	<u>車やデパートやいろいろな場所が光っています</u> 。	3	-
	C10	<u>工場が多いところ、塩浜や橋北ではいっぱい明かりがつかます</u> 。 <u>デパートやお店はお店が終わった</u> <u>ら明かりは消えるので、あまり明るくありません</u> 。	4	3
	C11	<u>中部地区は近鉄四日市駅やJR四日市駅があるので、夜遅くまで電気がついて明るい</u> です。	3	2
	C12	C8さんに反対で、 <u>寝ている人でも玄関に明かりをつけたりする人もいます</u> 。	3	-
	C13	<u>塩浜地区はコンビナートや工場が多いので明るくてきれい</u> です。	3	2
	C14	<u>塩浜地区と橋北地区で工場の夜景がすごくきれい</u> です。ナイトクルーズもあるそうです。	3	2
	C15	C6さんに付けたして、 <u>会社やビルとか家の光だ</u> と思います。	3	-
	C16	C6さんに反対で、 <u>ビルとか会社じゃなくて、工場とかで</u> …	3	-
	T2	C16さん。ビルとか会社よりも工場の方が明るいと思うの。(C16うなずく)。		
	C17	<u>水沢地区は森や自然が多いので、夜になると真っ暗になります</u> 。	3	2
C18	<u>中部の会社とかもだけど、工場もいっぱい明かりがついている</u> と思います。	3	2	
C19	<u>この赤と白の煙突のてっぺんの下には夜だときれいになると</u> 思いました。	3	-	
ど の 地 区 で ど の よ う な と こ ろ で 使 わ れ て い る か	C20	質問ですが、 <u>どこへ行っても同じ光り方をしているんですか</u> 。	3	3
	C21	たぶん夜は、夜は、 <u>どこかは明るい</u> と思います。	2	2
	C22	<u>日永地区の明かりは、駅やお店が、照明で明るくなっている</u> と思います。	3	3
	T3	明るさって違いがあるの。地区によって違いがあるの。		
	C23	(C4)(C7)たぶん <u>日永地区が光が多い</u> と思います。理由は、えっと <u>自分の家はあの8階までとかあ</u> <u>るので、人がいっぱい住んでいるからたぶん日永地区が光が多い</u> と思いました。	3	3
	C24	(C17) <u>水沢地区はやっぱ山が多いので、山とか自然が多く、明かりはつかない</u> と思います。	3	3
	C25	(C9) <u>水沢地区の学校もちょっとはついていて</u> と思います。	3	2
	C26	私は <u>塩浜地区だ</u> と思います。理由は工場がいっぱいあるからです。	3	3
	C27	<u>橋北地区とか塩浜地区はコンビナートなどの工場で明るいけど、八郷とかは伊坂ダムなどの…森</u> <u>が多いところは明るくない</u> と思います。	4	4
	C28	(C5) <u>日永地区がちょっと光る</u> と思います。理由は、 <u>日永地区には、結構家とかマンションがある</u> <u>ので、一部屋一部屋がととも夜になると光るので、明るい</u> と思います。	3	3
C29	(C12) <u>水沢地区は夜になると暗くなる地区だ</u> と思います。	2	3	
C30	(C3)明るいやろう。	2	-	
C31	(C12)(C29) <u>水沢地区は四日市の南西に位置するので、西の方は土地が高いので、畑とか茶畑が多</u> <u>いので、家は少なく街灯も少ないので、暗くなる</u> と思います。	4	4	
T4	C30さん、何か反対意見ある。			
C32	(C3)(C30) <u>水沢地区はホテルがおるから、明るい</u> 。	3	2	
T5	ホテルの光はあるということですね。電気の明かりは、どう。			
C33	(C3)(C30)(C32)ある。	2	-	
C34	<u>橋北地区は、車がいっぱい通るから、車の光が明るい</u> と思います。	3	3	

※ ( ) は同一児童の前の発言、枠は地区名(二重枠は自地区)、A は生活経験に基づく市規模の地域調査の活用、B は地理的アプローチに基づく市規模の地域認識、発言で A を下線、B を二重下線、太字は 3、太字斜字は 4 の評価を示す。(筆者作成)



るのかという全域を意識した発言である。教員がT3「明るさって違いがあるの。地区によって違いがあるの」と改めて各地区内の明かりの様子の違いに着目させ、四日市市全体の明かりの様子に児童の意識を向けようとした。C23(C4)(C7)「たぶん日永地区が光が多いと思います。理由は、えっと自分の家はあの8階までとかあるので、人がいっぱい住んでいるからたぶん日永地区が光が多いと思いました」やC24(C17)「水沢地区はやっぱり山が多いので、山とか自然が多く、明かりはつかないと思います」など、第2パートでの発言と比べて、取り上げた地区を空間の広がりをもった地域として意識した発言が出てきた。また、C27「橋北地区とか塩浜地区はコンビナートなどの工場で明るいけど、八郷とかは伊坂ダムなどの…森が多いところは明るくないと思います」など、地区の様子を比較し、四日市市全体の様子を捉える発言もみられるようになった。

第2パートと第3パートで34回の発言があり、クラスの34名中、24名が発言した。複数回発表した児童は最終発言でカウントすると、A3、B-の段階が6名、A2、B2の段階が1名、A3、B2の段階が7名、A3、B3の段階が7名、A4、B3の段階が1名、A4、B4の段階が2名となっている。発言していない児童や1回しか発言していない児童は、友達の発表を聞くことや板書を確かめることにより、ある程度は生活経験に基づいた市規模の地域の様子を理解ができていると推察される。第2から第3パートになるに従い、大枠でA3、B2の段階からA3、B3の段階となった。特徴的なまちの明かりに着目することで、児童は基域の地区の様子を生活経験に基づいて理解できたが、全域の市の様子を捉えることは難しかった。

#### 4. 児童の感想からの分析

表6は、単元終了後に、地区と市全体から地域の様子を捉えている主な児童の感想を示したものである。

①の児童は、自地区と他地区について、地区ごとの明かりやその出所である電線の背景としてお店が多い、工場が多いということを説明している。②の児童は他地区と他地区を比較して、明るさの違いの背景をコンビナートと茶畑という土地利用の違いから説明している。③の児童は電柱が多い背景を店や工場や商店街という産業と関わっていること、他地区の電柱が少ない背景を地形から説明している。④の児童は地区の特徴は家の多さや工場の多さやそれらに関連する光と関係するなど、場所の特徴の背景を一般化して説明している。また、鉄塔、工場、電柱などの光が通るものの存在により明るさが変わるなど明かりとその出所を一般化して説明している。さらに、後者について具体的に他地区を事例として説明している。①・③・④では、

明  
表6 児童の感想の分析

児童の感想	認識
①「日永地区は <b>お店が多い</b> ので、とても電線が多いと思います。 <b>塩浜</b> 地区は <b>とても工場が多い</b> ので、明かりがとても光っていて、電線が多いです」	地区【地域】 自地区と他地区 電線
②「 <b>水沢</b> 地区などよりも、 <b>塩浜</b> 地区の方が明るいと思います。 <b>なぜなら</b> 、 <b>塩浜</b> は <b>コンビナート</b> で明るいけど、 <b>水沢</b> は <b>茶畑が多い</b> ので、明かりはあまりありません」	地区【地域】 他地区と他地区 の比較
③「店や工場のところは電柱がいっぱいあって、商店街も電柱がいっぱいあるとわかりました。 <b>水沢</b> 地区は <b>山があるから</b> 、電柱は少ないと思いました」	地区【地域】 場所 他地区 電柱
④「家の多さ、工場の多さ、光の多さなどで地区の特徴は違ってきます。鉄塔、工場、電柱など光が通るものが少ないほど、明るさがちがってきます。 <b>中部</b> などの地区は、 <b>工場、鉄塔、電柱、電線</b> が多い <b>ため</b> 、明るいです」	地区【地域】 場所の背景と明かりの <b>出所</b> 鉄塔、電柱 電線

※枠は地区名、斜線太字は明かりに関わる背景、波下線は一般化された記述を示す。(筆者作成)

かりが多い地域ではそれを運ぶ電線や電柱や鉄塔などが多いという地域の具体的な事例から生活経験を基に捉えている。②は地区の比較から、地域の様子は場所によって違いがあることを捉えている。

単元全体の学習を通して、児童は明かりの要因を全域と基域の地理的事象から捉えていることがわかる。

#### V. 成果と課題

一般的な市規模の様子の授業では、地形や公共施設の有無、土地利用の違いなどを個々に調査し、それらを合わせて一枚の地図にまとめることが目指されるため、地域と自分とのつながりが弱く、生活経験に基づいた理解が不十分であった。

本研究の成果として、第3学年の導入単元である市規模の地域学習において、特徴的なまちの明かりに着目することで、児童は市規模の様子を生活経験に基づいて理解できることを明らかにしたことである。具体的には、明かりを使ったり見たりした生活経験から、他地区においても疑似体験として明かりの様子と自然的・社会的条件を関連づけて捉えることができた。また、全域と基域に着目して、基域である地区ごとの明かりの様子を自地区と比較しながら捉え、全域である市規模の中にある地区ごとの様子を児童に意識させることで、地域の様子は場所により違いがあることを捉えることができた。生活経験を基に市規模の様子を理解する地域調査であったことがわかる。

本単元で活用した地理的な見方・考え方を働かせることにつながる地理的アプローチの基礎は、現行学習指導要領において、①地理的環境と人々の生活に位置づけられてい

る第4学年の都道府県の様子や県内の地域の様子でも、都道府県が全域、市が基域として応用できる。本稿で開発した単元は、生活経験に基づいて地理的アプローチを活用した市規模の様子を理解する社会科学習のモデル単元として位置づけることができる。

課題として、第4段階で明かりを通して基域としての地区の特徴や背景を考えることにより、児童は四日市市の様子は場所により違っていることを空間を意識して捉えることができたが、全域の四日市市の様子まで十分に意識できなかった。基域を総合して全域の地域的特色を捉えるような手立てが不十分であった。事例として取り上げた基域と同じような地域が全域のどこに広がっているかを児童に考察させれば、全域の様子も捉えやすくなると考える。また、児童に明かりの強弱とともに色の違いについても意識させたい。

事例として取り上げた四日市市は、東部の臨海部に市街地やコンビナートがあり、西部には山間部があることから、明かりの強弱により地理的環境や人間生活を捉えやすい地域といえる。今後、他の市を事例とした授業を開発し、授業モデルの一般化を図りたい。

## 【注】

- 1) 中央教育審議会 (2016, p. 349) において、小学校の各内容がどの区分に位置づき、他の区分とどのように関連しているのか、中学校の地理的分野・歴史的分野・公民的分野とどのように関連しているのかについて図で示された。
- 2) 文部科学省 (2018a, pp. 31-37) において、第3学年では、これらの内容を学習することにより、自分たちの市規模を中心とした地域の社会生活を総合的に理解し、地域社会に対する誇りと愛情、地域社会の一員としての自覚を養うことが示されている。
- 3) 文部科学省 (2018b, pp. 33-36) において、地域の場所やそこで生活したり働いたりしている人々について考えるために、自分の家や学校の周りの田や畑、商店やそこで働く人、公園や公民館などの公共施設やそこを利用したり働いている人などが事例として示され、自分の生活と関わることを捉えるために実際に地域に出掛け、見たり、話を聞いたりする活動が示されている。
- 4) 前掲2), p. 36 に示されている。文部科学省 (2008, p. 23) においても、「身近な地域と市全体の地形や土地利用の特徴を比べて類似点や相違点を整理したりする活動を通して、身近な地域や市全体の地理的環境について理解を深めるようにすることが大切である」と示されている。
- 5) 小学校社会科の教科書の内容を参考にした。
- 6) 地域の産業を事例として、ウェビング法を用いて新たな社会的見方・考え方を獲得して社会的事象を総合的に理解する実践 (關, 2003) や空間の生産論を組み込んで社会空間の変容や空間相互の関係性を理解させる実践 (佐藤, 2005) などがある。
- 7) 地理学者が地表面に展開する諸現象の分布について説明・解釈するときの問いから導出された。文部科学省 (2018c, pp. 33-36), 文部科学省 (2019, pp. 39-42・pp. 80-83) に詳しく解説されている。
- 8) 全域とは対象とする地域全体で、基域とは全体をいくつかに分けた地域である。洪澤 (2001, pp. 102-103) は地域的特色を追究するに当たって、全域と基域の関係を考慮し、それぞれの面から調査、追究の営みが地理的な考え方のトレーニングになるとした。
- 9) 四日市市立泊山小学校の3年A組34名で、2017年の6月下旬から7月上旬にかけて実施した。
- 10) 児童の発言を基に記述している板書も参考にした。
- 11) 授業の主要な展開部分について示した。授業の流れがわかる範囲で教員と児童のやりとりを省略した部分や発言の意図が変わらない範囲で表現を変えた部分がある。

## 【参考文献】

- 魚地伸子 (1985) 社会科指導における「地域」, 佐島群巳・次山信男・魚地伸子編『地域を扱う学習の方法と授業』教育出版. pp. 2-12.
- 佐藤克士 (2005) 社会空間の変容を捉えさせる小学校社会科授業開発—第3学年地域学習単元「梨農家ではたらく人々(筑西市関城地区)の場合—, 社会系教科教育学研究 27, pp. 61-70.
- 洪澤文隆 (2001) 『中学校社会科新地理学習の方向と展開』明治図書.
- 清水幸男 (2006) 身近な地域の学習(地域学習)」, 日本地理教育学会編『地理教育用語技能事典』帝国書院, p. 94.
- 關浩和 (2003) ウェビング法による小学校社会科地域学習の単元開発—第3学年単元「わたしたちの市—広島かき—」の場合—, 社会科研究 59, pp. 31-40.
- 田山修三 (1997) 札幌のまちの広がりはどうなっているのだろうか—3年 市の広がり土地利用の様子を調べる—, 北俊夫編『調べ学習 社会科の授業づくり① 地域社会の様子を調べる授業』国土社, pp. 55-64.
- 中央教育審議会 (2016) 『幼稚園、小学校、中学校、高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について(答申)』.
- 永田成文 (2017) 「地理的な見方・考え方」を働かせた地理の学習」井田仁康・中尾敏明・橋本康弘編『授業が変わる! 新しい中学社会のポイント』日本文教出版, pp. 106-109.
- 萩原浩司・永田成文・山根栄次 (2017) エネルギー使用の持続可能性を考える小学校社会科歴史学習, 社会科教育研究 130, pp. 25-37.
- 文部科学省 (2008) 『小学校学習指導要領解説 社会編』東洋館出版社.
- 文部科学省 (2018a) 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』日本文教出版.
- 文部科学省 (2018b) 『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説 生活編』東洋館出版社.
- 文部科学省 (2018c) 『中学校学習指導要領(平成29年告示)解説 社会編』東洋館出版社.
- 文部科学省 (2019) 『高等学校学習指導要領(平成30年告示)解説 地理歴史編』東洋館出版社.